

宮崎県文化財調査報告書

第 31 集

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 31 集

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

序

このたび、宮崎県文化財調査報告書第31集を刊行することになりました。宮崎県教育委員会では文化財指定のための調査、あるいは農耕・開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は、昭和49年度に調査を実施した都城市丸山遺跡のほか、昭和62年度に調査した4遺跡について概略をまとめました。

本書が社会教育・学校教育の場において広く活用され、また学術研究の資料として役立つことを期待いたします。

なお、調査に際して御協力いただいた地元の方々、および市町村教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和63年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船 木 哲

例 言

1. この報告は、宮崎県教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告である。
2. 掲載しているのは、縄文時代の遺跡 1 件、および昭和62年度に宮崎県教育委員会が主体となって調査した三遺跡の概要である。
3. 執筆者名・調査期日等は下記のとおりである。本書の編集は宮崎県教育庁文化課がおこなった。

記

項目 件	遺 跡 名	所在地	調 査 期 日	調査担当 ・執筆者
1	丸 山 遺 跡	都城市	昭和49年10月3日・4日	岩永哲夫
2	大 淀 3 号 古 墳	宮崎市	昭和62年5月19日～7月15日	長津宗重
3	権 現 昔 遺 跡	宮崎市	昭和62年9月18日～12月5日	面高哲郎
4	多 宝 寺 遺 跡	宮崎市	昭和62年9月18日～12月5日	面高哲郎
5	地 蔵 ケ 森 遺 跡	延岡市	昭和62年8月3日～9月9日	近藤 協

総 目 次

1.	丸山遺跡発掘調査報告	1
2.	大淀古墳3号調査概要報告	18
3.	権現昔遺跡発掘調査概要報告	21
4.	多宝寺遺跡発掘調査概要報告	23
5.	地藏ヶ森遺跡発掘調査報告	26
付 1.	昭和61・62年度埋蔵文化財発掘調査一覧	29
2.	昭和62年発行宮崎縣市町村発行埋蔵文化財報告書一覧	33

まる やま 遺 跡

例 言

1. 本報告は、昭和49年10月3・4日に宮崎県教育委員会によって行われた都城市丸山遺跡の発掘調査報告である。
2. 遺物の整理および執筆・編集は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター主任岩永哲夫が行った。
3. 出土品の「色調」については「新版標準土色帖」を使用した。
4. 遺物は都城市立郷土館に保管している。

本文目次

I、遺跡の所在地および調査に至る経緯	1
II、調査の結果	3
1. 遺構	3
2. 遺物	3
III、まとめ	9

挿図目次

第1図 丸山遺跡位置図	1
第2図 丸山遺跡周辺地形図	2
第3図 トレンチ位置図	3
第4図 トレンチ状況図	4
第5図 集石遺構平面図	4
第6図 出土土器実測図(1)	5
第7図 出土土器実測図(2)	7
第8図 出土土器実測図(3)	8

表目次

表 縄文土器観察表	11
-----------	----

図版目次

図版1 出土土器(1)	14
図版2 出土土器(2)	15
図版3 出土土器(3)	16



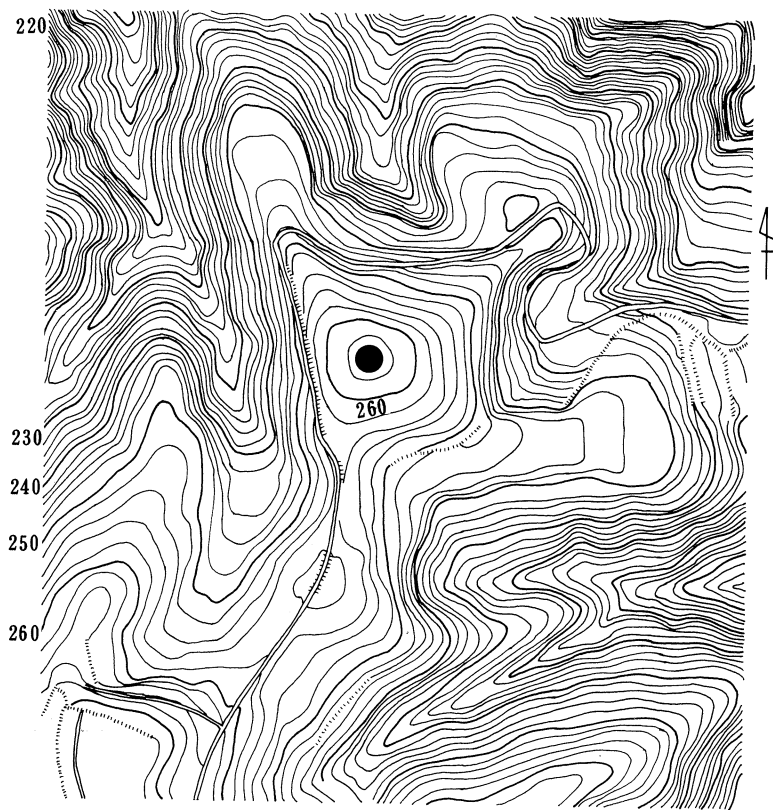
第1図 丸山遺跡位置図 (●印)

I. 遺跡の所在地および調査に至る経緯

丸山遺跡は都城市関之尾町字丸山5988番地に所在する。遺跡は都城盆地を取り巻く丘陵群の一つ、東流する庄内川と横市川（ともに大淀川の支流）に挟まれた東に延びる丘陵上であり、標高263mの高所に位置する。母智丘神社の北北西約1kmの地点である（第1・2図）。

遺跡周辺は都城観光開発株式会社が約90haに亘ってゴルフ場を計画していた。その造成作業中に縄文土器が出土し、遺跡の所在が明らかになった。昭和49年9月17日のことである。直ちに遺跡の取り扱いについて県文化課、都城市立図書館（当時は文化財行政も所管していた）、都城観光開発の間で協議を行い、結果、発掘調査により記録保存することになった。

調査は同年10月3・4の両日、アカホヤ層下の包含層が残っていた約100m²を対象として実施した。調査には都城市立図書館および遺跡の発見から終始お世話戴いた児玉三郎氏の全面的な協力を得て、県文化財専門委員日高正晴・県文化課主事岩永哲夫が担当した。



第2図 丸山遺跡周辺地形図

II. 調査の結果

調査の方法は、包含層の残存している地区に南北の方位に合わせ $1.5 \times 9m$ と $1.2 \times 10m$ の2本のトレンチを設定した(第3図)。

1. 遺構

調査にかかる時点で既に一部遺構遺物の露出がみられたが、確認し得た遺構は集石遺構であった。それは数箇所に残された焼礫の集合であり、現在知られている多くの例から集石遺構と判断されるものである。しかし、完全な状態ではなく上部は造成作業によって削平されているものと考えられる(第4・5図)。

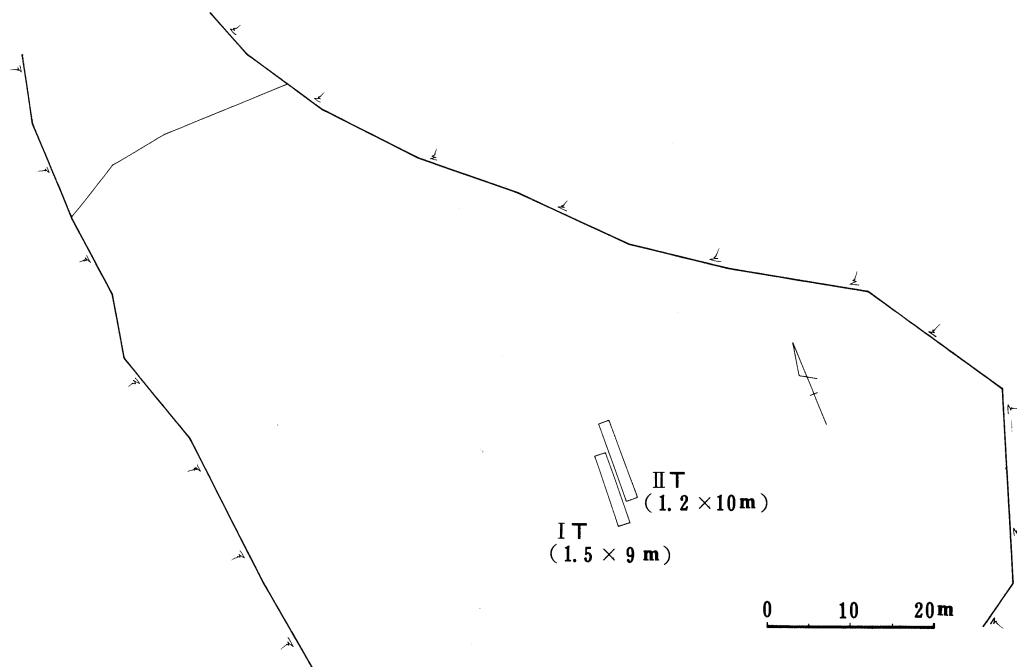
2. 遺物

検出された遺物は縄文早期の各種土器(第6～8図)と僅かな石片である。層位的な上下関係は把握していない。

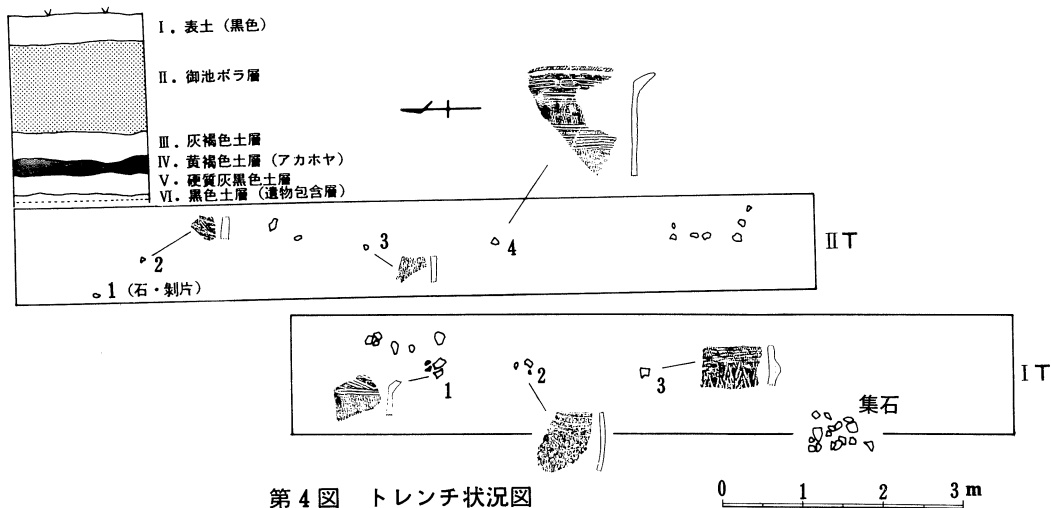
早期の土器は豊富な型式がみられ、10類に大別できる。

1類 押型文土器(第6図1～7)

—1 山形文(1～6)



第3図 トレンチ位置図

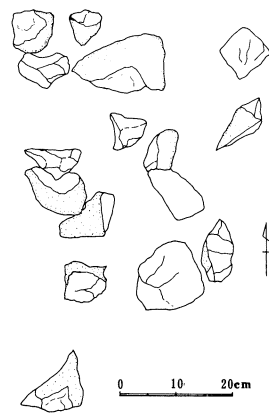


第4図 トレンチ状況図

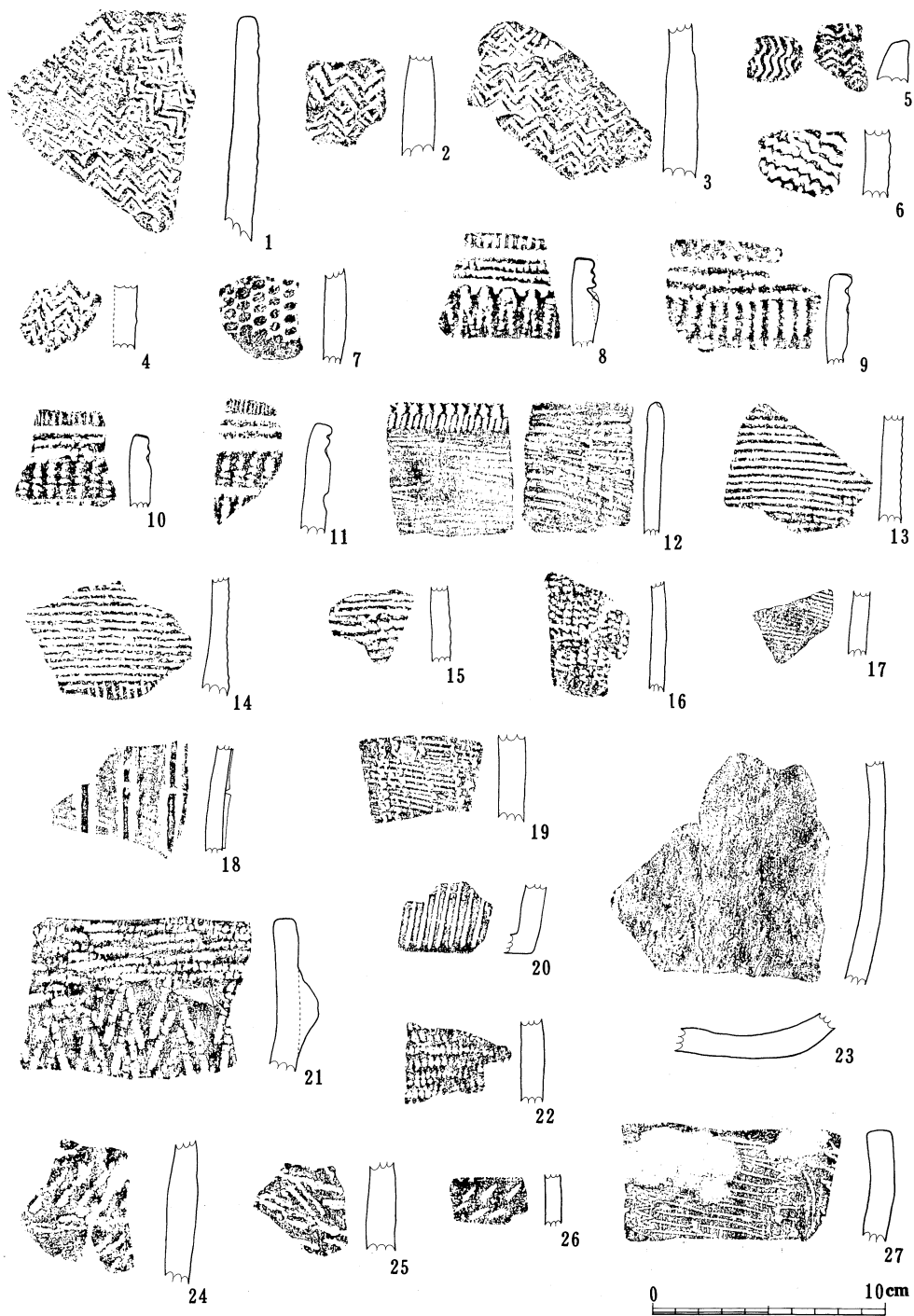
- a 口縁部が直線的に伸び、粗大な山形文で施文が雑である。(1~4)
- b 口縁部が外反し、外面(縦走)・内面(横走)・口唇部にやや丁寧に施文している。(5)
- c 器形は不明、丸みのある山形文。(6)
- 2 楕円文(7)
- 器形は不明、一部に無文部がある。

2類 貝殻文施文円筒形土器(第6図8~22・24・25)

- 1 貝殻腹縁刺突文(21・22・24・25)
 - a 直立する口縁部で、上位には横方向に刺突し、その下には鋸歯状に二段以上刺突している。こぶ状突起がある。(21)
 - b 器形は不明、斜め・横方向に刺突している。(24・25)
 - c 横方向に浅く刺突している。(22)
- 2 貝殻腹縁刺突文+貝殻腹縁押し引き文<吉田式土器>(8~11・13~16・20)
 - a 口縁部は僅かに外反し、外面・口唇部に施文している。外面は上位に横方向に二段刺突し、その下に貝殻を立てて密接して横へ押し引いている。更にその下には横方向に一段刺突している。口唇部には刻みを入れている。(9~11)



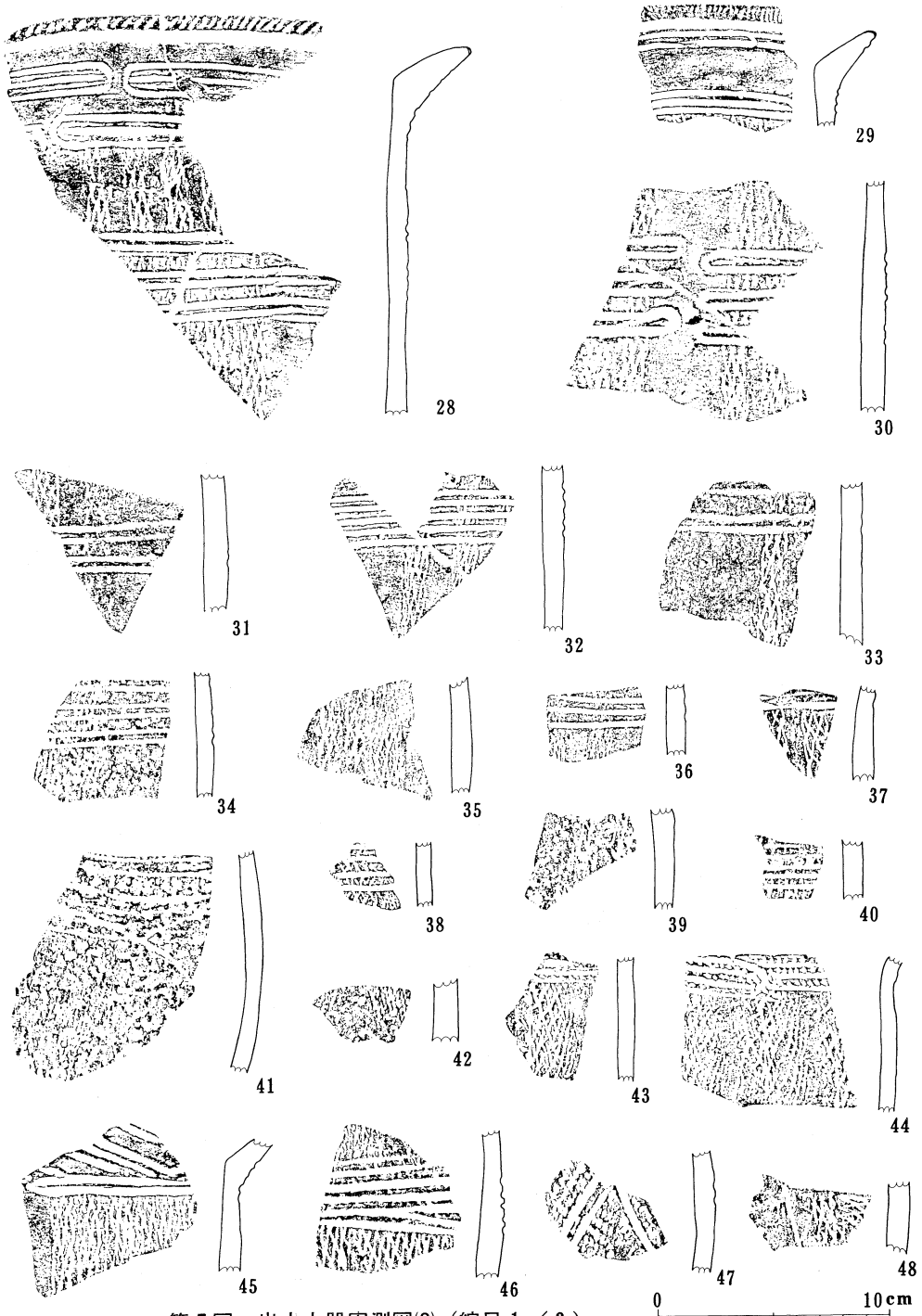
第5図 集石遺構平面図



第 6 図 出土土器実測図(1) (縮尺 1 / 3)

- b 器形・施文部とも a に類似しているが、外面文様に高度な意匠感覚が発揮されている。押し引きに通じる技法で上位の幅広い下位の狭いクサビ形状突起を作り出している。この過程を経て現在議論のある「前平式」「吉田式」^註周辺にみられるスマートなクサビ形貼付文の誕生があったものと考えられる。(8)
- c 押し引きおよび条痕文のみられる土器であるが、この類に含めるべきか疑問が残っている。(13~16・20)
- 3 貝殻腹縁刺突文+貝殻条痕文<前平式土器>(12・17)
 - a 直立する口縁部で、上位に刻み状の腹縁刺突文を一段巡らし、その下位にも一段刺突している。以下は全面に浅い貝殻条痕がみられる。(12)
 - b 胴部片で浅い条痕がみられる。(17)
- 4 すっきりしたクサビ形貼付文を二段以上にわたって施文している。地文としてうすく条痕がみられる。(18)
- 5 部分的で全容はわからないが、条痕を地文としてその上に貝殻腹縁刺突文を斜走させている。(19)
- 3 類 条痕文施文円筒形土器(第6図26・27)
 - 1 内彎気味の口縁部で、外面に先端の細い施文具による細条痕を横方向に施文し、次の条痕との間に空間を設けて、その部分には縦方向に波状の細条痕を施文している。(27)
 - 2 器形は不明であるが、文様からこの類に含めた。短沈線様の文様を斜めに規則的に施している。(26)
- 4 類 無文角筒形土器(第6図23)

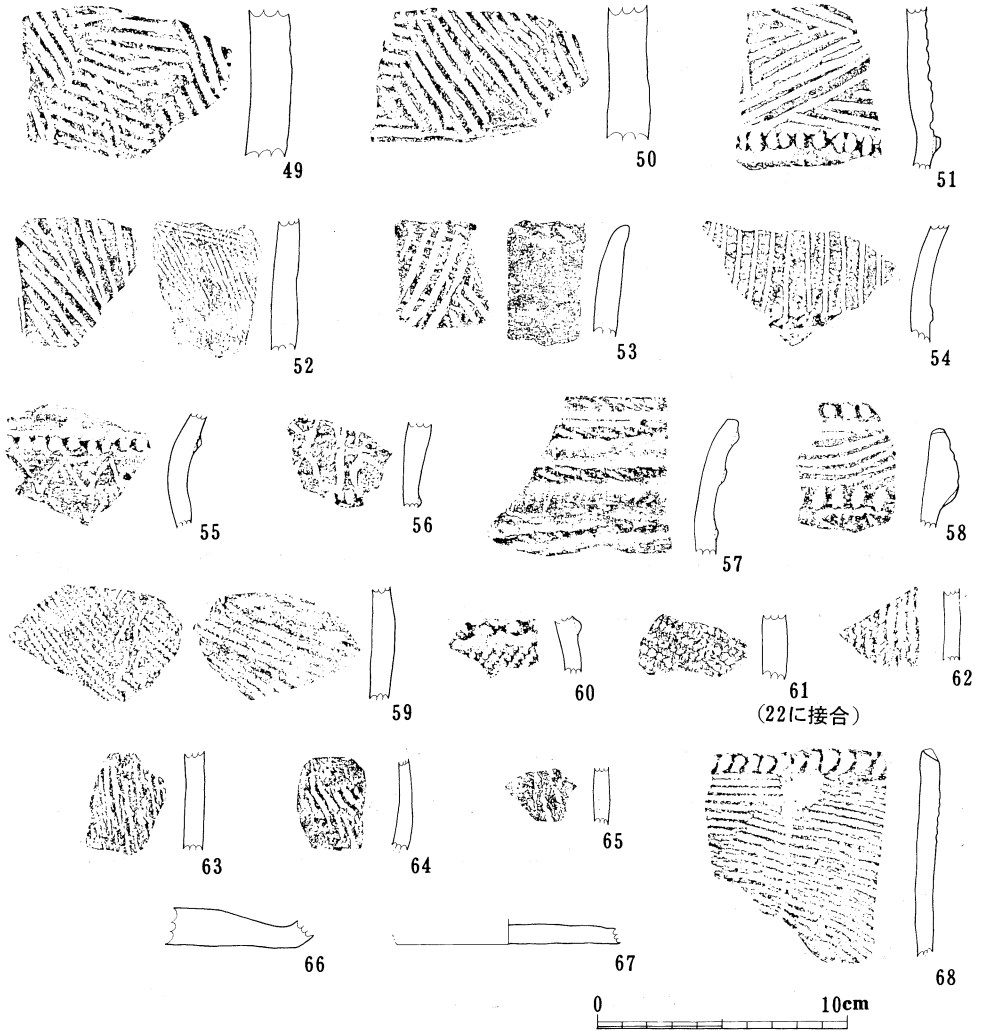
底部に近い部位と考えられる。器面は滑らかで一切文様はない。
- 5 類 撚糸文および縄文施文頸部屈折深鉢形土器<塞ノ神式土器>(第7図28~48)
 - 1 頸部で屈折し、口縁部が大きく外側に開く器形の土器である。口唇部には刻み目を入れ、口縁部には二条単位の沈線を一段巡らしているが、二条の沈線間に一条の沈線を加えて三条沈線と成し、途中で閉じることによって文様効果を上げている。頸部に一段、胴部にも二・三段施文している。また、頸部から底部へ向けて網目状撚糸文を間隔を置きながら縦走させている。(28~41)
 - 2 器形・文様とも 1 に類似する点が多いが、ここでは相違点をあげておきたい。まず、器壁がうすいこと、次に頸部の沈線間に細かな刺突を施すことである。頸部の



第7图 出土土器实测图(2) (縮尺 1 / 3)

刺突部分は恰も刻目細隆線文のような様相を呈している。平椀式土器との関連を窺わせる。(43・44)

- 一3 屈折する頸部を境に上位に沈線文、下位に施文幅の広い網目状撚糸文がみられる(45)。また、胴部の撚糸文の上に重ねて数条の沈線を施すものもある(46)。
- 一4 画線のある塞ノ神式土器であるが、撚糸文・縄文の二種がみられる。(42・47・48)



第8図 出土土器実測図(3) (縮尺1/3)

6類 <手向山式土器> (第8図51~54)

口縁部から頸部にかけての部位にあたる。口縁部には沈線を縦・横・斜方向に単純にまた組み合わせて施文し、頸部には刻み目突帯を付けている(51・54)。口縁部内面には斜めに刻みを入れている(53)。

7類 <平椀式土器> (第8図55・56・58~60・62)

部分的な出土で全容を掴むことができないが、近いとみられるものをも含めておきたい。58の口縁部、59の胴部は典型的である。

8類 貼り付け突帯文土器 (第8図57)

口縁部直下から貼り付け突帯があり、突帯上および口唇部には斜めに浅い押圧文がみられる。

9類 撚糸文土器 (第8図63~65)

器形は不明、縦または斜め方向に撚糸文を施文している。

10類 貝殻条痕文土器 (第8図49・50)

器形は不明、器壁が頗る厚く、外面全面に貝殻条痕を縦・横・斜め方向に施文している。内面の調整は滑らかである。

以上の他、平底になる底部が出土している。(第8図66・67)

III. まとめ

丸山遺跡は縄文時代早期の遺跡にふさわしい立地条件の中にある。それ故に、採集された遺物は少量であるにも拘らず豊富な型式を含むものであった。内陸部の早期を知る上で貴重な資料を得ることができた。

1. 遺構について

遺構については集石遺構を確認したが、現時点では石蒸し炉(earth-oven)として考えられている。具体的な調理方法になると南太平洋地域の一部で現在も行われている方法に学ばざるをえない。しかし、同時に炉以外の性格の可能性も残されており、調査技術の工夫も追求しなければならない。

2. 土器について

出土土器について若干触れておきたい。さきに分類したように南九州の早期にみられる多くの型式を得た。5千年にも亘る早期の期間を考えれば当然のことともいえるが、残念ながら層位学的方法のみによっては型式の変遷は把握できない。型式学的方法を加えた南九州

の編年では大まかに貝殻文円筒形土器・押型文土器・手向山式土器・平椀式土器・塞ノ神式土器という推移が考えられる。丸山遺跡ではこれらのいずれも出土しているが、二三問題にしたい点をあげておきたい。

・クサビ形貼り付け突帯文土器

吉田式土器の中にその誕生を示す技術があり、後のクサビ形貼り付け突帯文の前身として位置づけることができる。

・押型文土器

東九州を中心として研究の進展した押型文土器の編年を南九州においてそのまま適用することは難しい。つまり、口縁部の形態にあらわれているように外反する口縁部の内面・口唇部に施文するタイプとともに直立する口縁部の外面のみに施文するタイプがかなりの遺跡において出土している。貝殻文円筒形土器との共伴でもあり、強い関連性を窺わせるが、時期的・系譜的な問題が残っている。

・塞ノ神式土器

縄文・撚糸文系のみ出土している。貝殻文系とは分布・立地を異にしており、形式的には分離される。貝殻文系の内陸部への浸透状況の把握も課題である。また、43・44の土器は平椀式と通じる点もあり、興味深い。

都城盆地をかこむ丘陵群は都城地方の歴史の源でもあり、後世の営みを現在にまで見据え続けてきた母胎として意識付けしておく必要がある。そのことによって歴史の解明は大きく前進することになるであろう。

註 「吉田式」「前平式」について、鹿児島県椀ノ原遺跡の調査以後、概念規定に一部混乱がみられていたが、長野真一・本田道輝によって検討が行われ、新形式設定の必要性が提起されているところである。

長野真一「上被川遺跡群」『鹿屋市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』鹿屋市教育委員会 1984.3
本田道輝「鹿児島県考古学の問題点—縄文時代」『鹿児島考古第20号』鹿児島県考古学会 1986.6

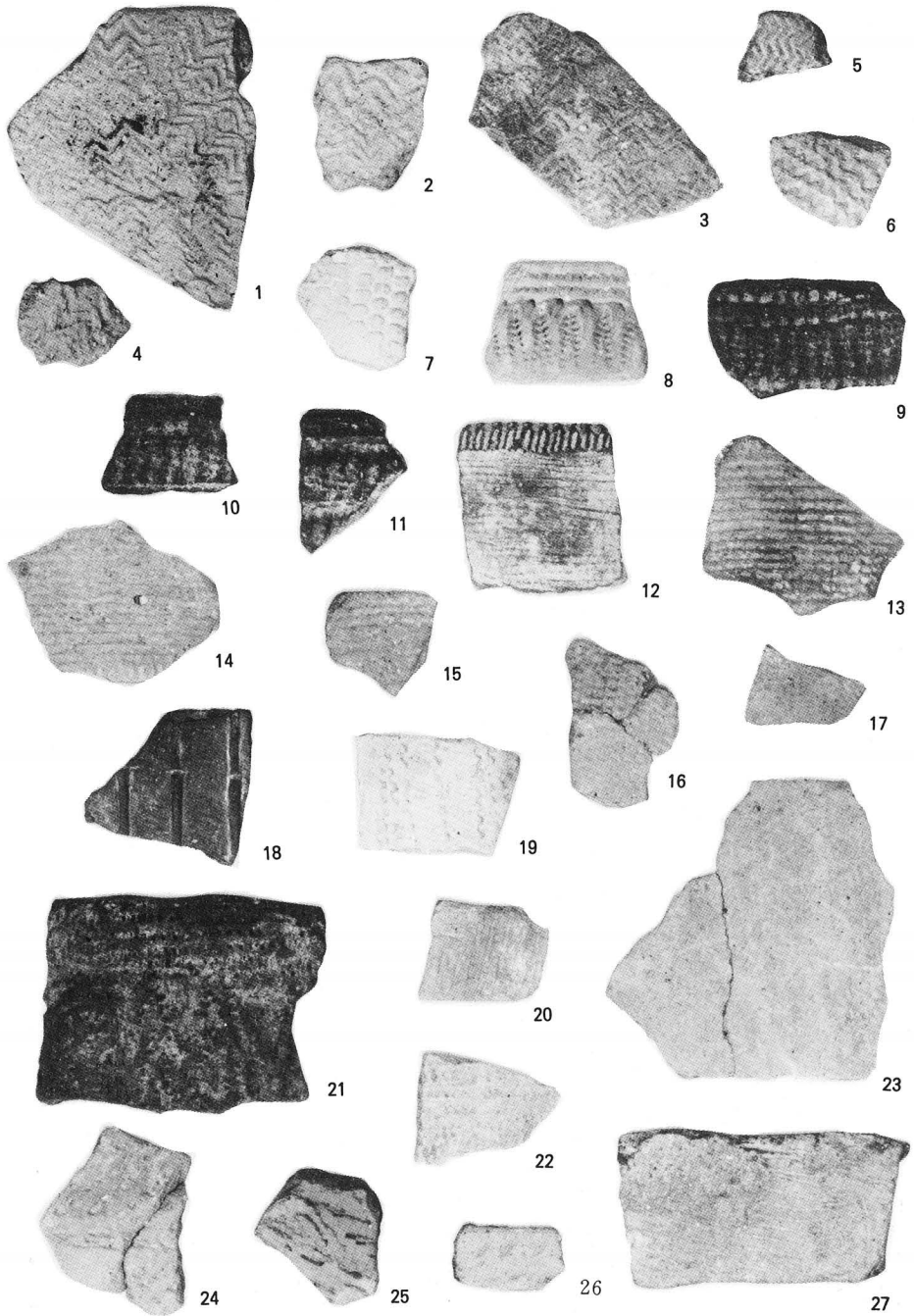
表 縄文土器観察表

測図 番号	遺物 番号	出土 地点	分類	型式	文 様	胎 土	色 調		焼成	備 考
							外 面	内 面		
1	1		1-1-a		粗大な山形押型文 施文方向不定	角閃石多 2~4ミリ砂粒	橙 (2.5 YR 6/6)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	良	
2	2		"		粗大な山形押型文	角閃石多 2~4ミリの砂粒	橙 (2.5 YR 6/6)	暗赤褐 (5 YR 3/2)	良	No.1と 同一個
3	3		"		粗大な山形押型文	角閃石多 2~3ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 4/4)	にぶい黄橙 (10 YR 7/4)	良	No.1と 同一個か?
4	6		"		粗大な山形押型文	角閃石含 1~2ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	—	良	
5	4		1-1-b		外面・口唇・内面上 位に山形押型文	角閃石少 1ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/3)	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	やや 不良	
6	5		1-1-c		丸味のある山形押型 文	角閃石、金雲母 1ミリ砂粒	にぶい橙 (5 YR 6/4)	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	良	
7	7		1-2		楕円押型文 無文部あり	角閃石少 1~4ミリ砂粒	橙 (5 YR 6/6)	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	良	
8	8		2-2-b	吉田式	貝殻腹縁刺突文 口唇部刻目	角閃石少 1~4ミリ砂粒	明赤褐 (5 YR 5/8)	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	良	
9	9		2-2-a	"	貝殻腹縁刺突文・ 押し引き文・口唇刻目	金雲母多、角閃 石、1ミリ砂粒	暗赤褐 (5 YR 3/2)	にぶい橙 (5 YR 6/3)	不良	
10	10		"	"	No.9に同じ	No.9に同じ	No.9に同じ	No.9に同じ	不良	
11	11		"	"	No.10に同じ	No.10に同じ	暗赤褐 (5 YR 3/2)	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	不良	No.10と 同一個
12	12		2-3-a	前平式	口縁上位に貝殻刺突 下位は貝殻条痕	角閃石 1ミリ砂粒	灰 褐 (5 YR 4/2)	外面に同じ	良	
13	13		2-2-c	吉田式 or 前平式	貝殻条痕 一部押し引きあり	金雲母 1~3ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	橙 (5 YR 6/6)	良	
14	14		"	"	貝殻条痕	1~3ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	外面に同じ	良	
15	15		"	"	貝殻条痕	金雲母 1~2ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	灰 褐 (5 YR 4/2)	良	
16	17		"	吉田式	貝殻押し引き文	金雲母 1~3ミリ砂粒	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	橙 (7.5 YR 6/6)	やや 不良	
17	16		2-3-b		浅い貝殻条痕	角閃石少 1ミリ砂粒	にぶい赤褐 (2.5 YR 4/4)	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	良	
18	23		2-4		クサビ形貼付文	角閃石 1ミリ砂粒	極暗赤褐 (5 YR 2/4)	外面に同じ	やや 不良	
19	22		2-5		貝殻条痕地文 縦位腹縁刺突文	細砂粒	橙 (7.5 YR 6/6)	にぶい橙 (5 YR 6/4)	良	
20	24		2-2-c		(底部) 斜めに細沈線	角閃石 1ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/3)	にぶい赤褐 (2.5 YR 5/3)	良	
21	25	I T No.3	2-1-a		貝殻刺突文 (横列および鋸歯状)	角閃石 1ミリ砂粒	暗赤褐 (5 YR 3/4)	外面に同じ	良	
22	1840		2-1-c		貝殻刺突文	金雲母 1~3ミリ砂粒	橙 (5 YR 6/6)	外面に同じ	やや 不良	

実測 図 番号	遺物 番号	出 土 地 点	分 類	型 式	文 様	胎 土	色 調		焼 成	備 考
							外 面	内 面		
23	21		4		無 文	角閃石 1~2 ミリ砂粒	にぶい橙 (5 YR 6/4)	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	良	角筒土 器
24	26		2-1-b		貝殻刺突文 (斜走、横走)	角閃石少 1~3 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (2.5 YR 5/4)	にぶい赤褐 (2.5 YR 4/4)	良	
25	27	II T No. 2	"		No.24に同じ	No.24に同じ	赤 褐 (2.5 YR 4/6)	にぶい赤褐 (2.5 YR 4/4)	良	No.24と 同一個 体
26	20		3-2		規則的なヘラ刺突文	金雲母 1~2 ミリ砂粒	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	外面に同じ	良	
27	19		3-1		細線条痕文	金雲母、角閃石 1~2 ミリ砂粒	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	にぶい褐 (7.5 YR 5/3)	良	
28	43	II T No. 4	5-1	塞ノ神 式	口唇部斜刻目文 沈線、網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	灰 褐 (5 YR 4/2)	にぶい赤褐 (5 YR 4/3)	良	
29	44	トレン チ周辺	"	"	口唇部刻目文 沈線、燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	橙 (7.5 YR 7/6)	良	
30	46	"	"	"	2条単位の沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	良	
31	48	"	"	"	2条単位の沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい黄橙 (10 YR 7/4)	橙 (7.5 YR 7/6)	良	
32	49	"	"	"	沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	橙 (7.5 YR 7/6)	灰 褐 (7.5 YR 4/2)	良	
33	51	"	"	"	2条単位の沈線文 網目燃糸文	角閃石 1~2 ミリ砂粒	にぶい黄橙 (10 YR 6/4)	灰 褐 (7.5 YR 4/2)	良	
34	52	"	"	"	2条単位の沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	橙 (7.5 YR 6/6)	外面に同じ	やや 不良	
35	53	"	"	"	網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	明 褐 (7.5 YR 5/6)	暗 褐 (7.5 YR 3/4)	やや 不良	
36	55	"	"	"	3条沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい黄橙 (10 YR 7/4)	外面に同じ	良	
37	57	"	"	"	沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 4/3)	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	良	
38	61	"	"	"	沈線文 網目燃糸文	金雲母少 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/3)	にぶい赤褐 (2.5 YR 5/4)	良	
39	56	II T No. 3	"	"	網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	橙 (5 YR 6/6)	にぶい赤褐 (5 YR 4/3)	良	
40	59	"	"	"	沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/3)	灰黄褐 (10 YR 5/2)	良	
41	68	I T No. 2	"	"	細い沈線文 網目燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	橙 (5 YR 6/6)	灰 褐 (5 YR 4/2)	良	
42	60	"	5-4	"	画線のある燃糸文	角閃石、金雲母 1~3 ミリ砂粒	にぶい橙 (5 YR 6/4)	黒 褐 (5 YR 2/2)	良	
43	54	"	5-2		浅沈線文、刻目刺突 文、網目燃糸文	金雲母 1 ミリ砂粒	明 褐 (7.5 YR 5/6)	明赤褐 (5 YR 5/6)	良	
44	47	"	"		No.43に同じ	No.43に同じ	橙 (7.5 YR 6/6)	橙 (5 YR 6/6)	良	
45	45	I T No. 1	5-3	塞ノ神 式	沈線文 幅広の燃糸文	角閃石 1 ミリ砂粒	黒 褐 (7.5 YR 3/2)	暗赤褐 (5 YR 3/3)	良	

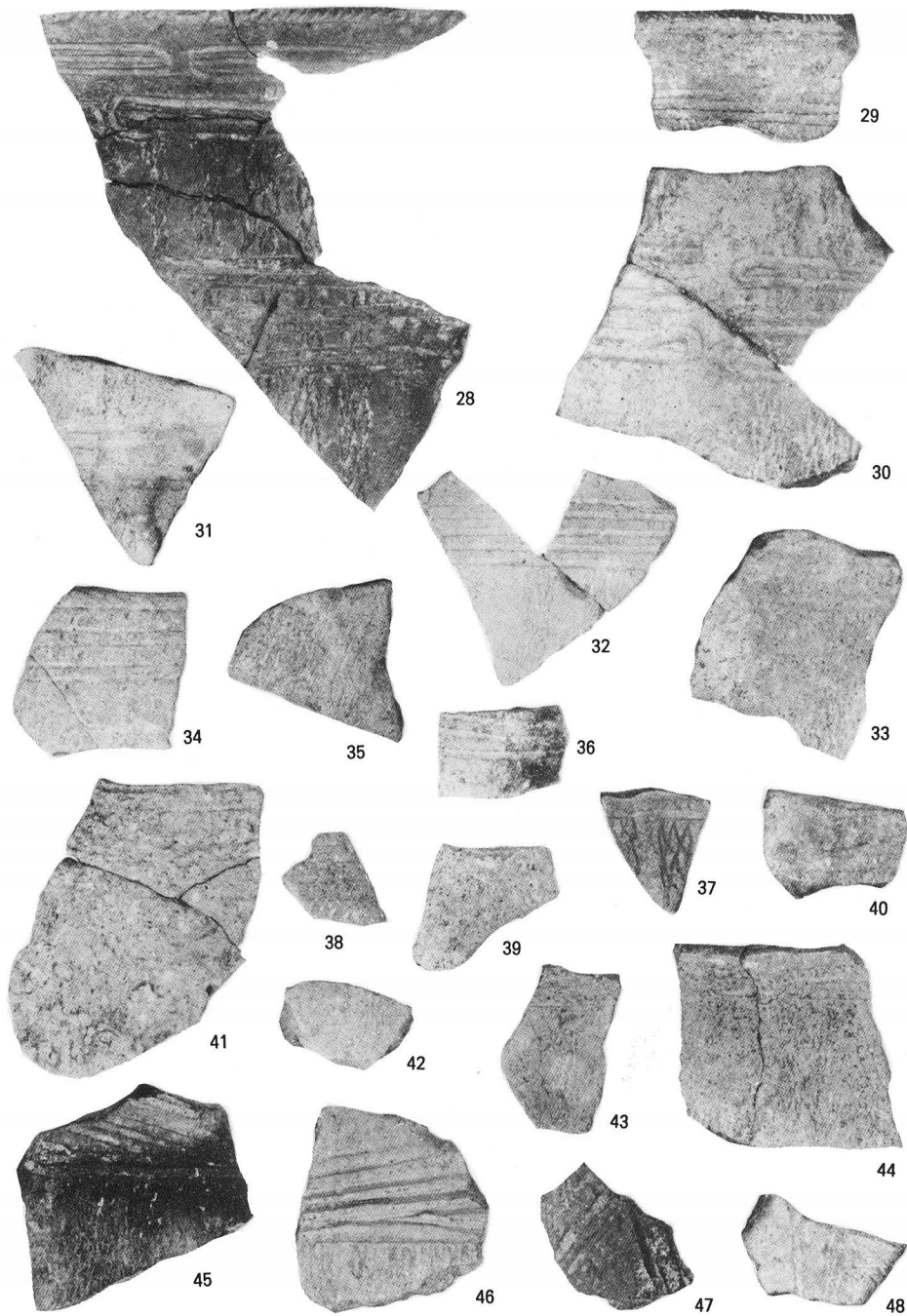
実測 図号 番号	遺物 番号	出土 地点	分 類	型式	文 様	胎 土	色 調		焼成	備 考
							外 面	内 面		
46	50	トレン チ周辺	5-3	塞ノ神 式	深い沈線文、密接施 文、網目撚糸文	金雲母 1~3 ミリ砂粒	にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	橙 (5 YR 6/6)	良	
47	62		5-4	"	深い画線のある粗い 縄文	角閃石 1~2 ミリ砂粒	暗赤褐 (2.5 YR 3/3)	灰 赤 (2.5 YR 4/2)	良	
48	58		"		画線のある網目撚糸 文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	にぶい赤褐 (5 YR 5/3)	良	
49	28		10		外面全面貝殻条痕文	角閃石、金雲母 1~3 ミリ砂粒	橙 (7.5 YR 6/6)	橙 (7.5 YR 7/6)	良	
50	29		"		No49に同じ	No49に同じ	暗赤褐 (5 YR 3/3)	にぶい橙 (5 YR 6/4)	良	No49と 同一個
51	30		6	手向山 式	深い沈線文 刻目突帯文	角閃石 細砂粒	橙 (5 YR 6/6)	橙 (7.5 YR 7/6)	良	
52	31		"	"	やや浅い沈線文	角閃石 細砂粒	橙 (5 YR 7/6)	灰 褐 (5 YR 4/2)	良	
53	32		"	"	外面沈線文 口唇内面斜刺突文	角閃石 1~2 ミリ砂粒	黒 褐 (5 YR 3/1)	明赤褐 (5 YR 5/6)	やや 不良	
54	34		"	"	地文の上に沈線文 貼付突帯文	金雲母、角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	褐 (7.5 YR 4/3)	良	
55	35		7	平椀式	刻目突帯文 下位に鋸歯状沈線文	金雲母 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 4/4)	赤 褐 (5 YR 4/6)	不良	
56	33		"	平椀式 or 手向山 式	沈線文 刻目突帯	金雲母多 1~3 ミリ砂粒	暗赤褐 (5 YR 3/2)	灰 褐 (5 YR 4/2)	不良	
57	37		8		突帯の上に斜押圧文	角閃石 細砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/3)	外面に同じ	やや 不良	
58	36		7	平椀式	口唇部大きな刻目文 沈線文	金雲母多 1~2 ミリ砂粒	赤 褐 (2.5 YR 4/6)	にぶい赤褐 (2.5 YR 4/4)	不良	
59	39		"	"	斜縄文 (胴部)	金雲母多 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	暗赤褐 (5 YR 3/3)	良	
60	38		"	"	刻目貼付突帯文 下位斜縄文	角閃石 1~2 ミリ砂粒	にぶい褐 (7.5 YR 5/4)	黒 褐 (7.5 YR 3/2)	良	
61	40	(22に 接合)								
62	67		7	平椀式	斜縄文	金雲母 1 ミリ砂粒	にぶい赤褐 (2.5 YR 4/3)	暗赤灰 (2.5 YR 3/1)	良	
63	41		9		斜撚糸文か	角閃石 細砂粒	橙 (5 YR 6/6)	にぶい赤褐 (5 YR 5/4)	良	
64	42		"		斜撚糸文か	角閃石少 細砂粒	灰 褐 (5 YR 4/2)	にぶい赤褐 (5 YR 4/3)	良	
65	63		"		押圧撚糸文	角閃石少 細砂粒	にぶい橙 (5 YR 6/4)	灰 褐 (5 YR 5/2)	良	
66	64		底 部			角閃石 1 ミリ砂粒	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	橙 (5 YR 6/6)	良	
67	65		"			角閃石 1 ミリ砂粒	橙 (5 YR 6/6)	黒 褐 (7.5 YR 3/1)	良	
68	66	参道脇	2-3-a	前平式	口縁部上位深い刻目 文、下位貝殻条痕文	角閃石 1 ミリ砂粒	にぶい橙 (5 YR 6/4)	橙 (2.5 YR 6/6)	良	

図版 1



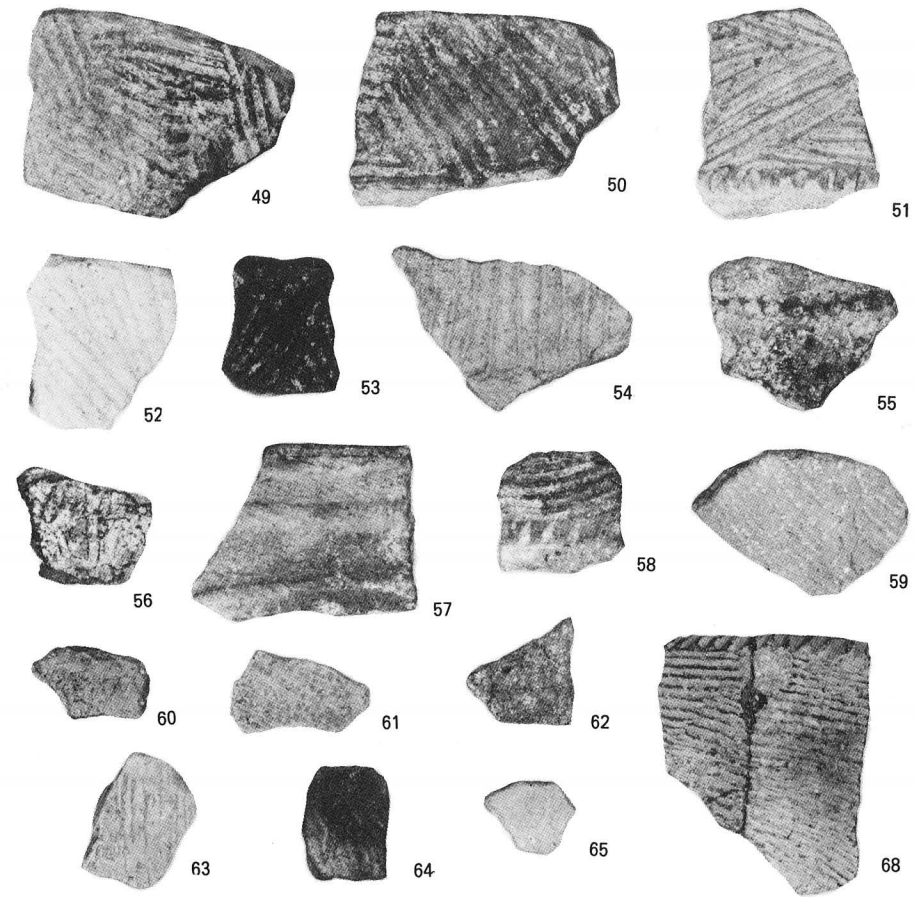
(番号は実測図番号に同じ)

図版 2



(番号は実測図番号に同じ)

図版 3



(番号は実測図番号に同じ)



おお よど
大 淀 3 号 古 墳

ごん げん じやく
権 現 昔 遺 跡

た ほう じ
多 宝 寺 遺 跡

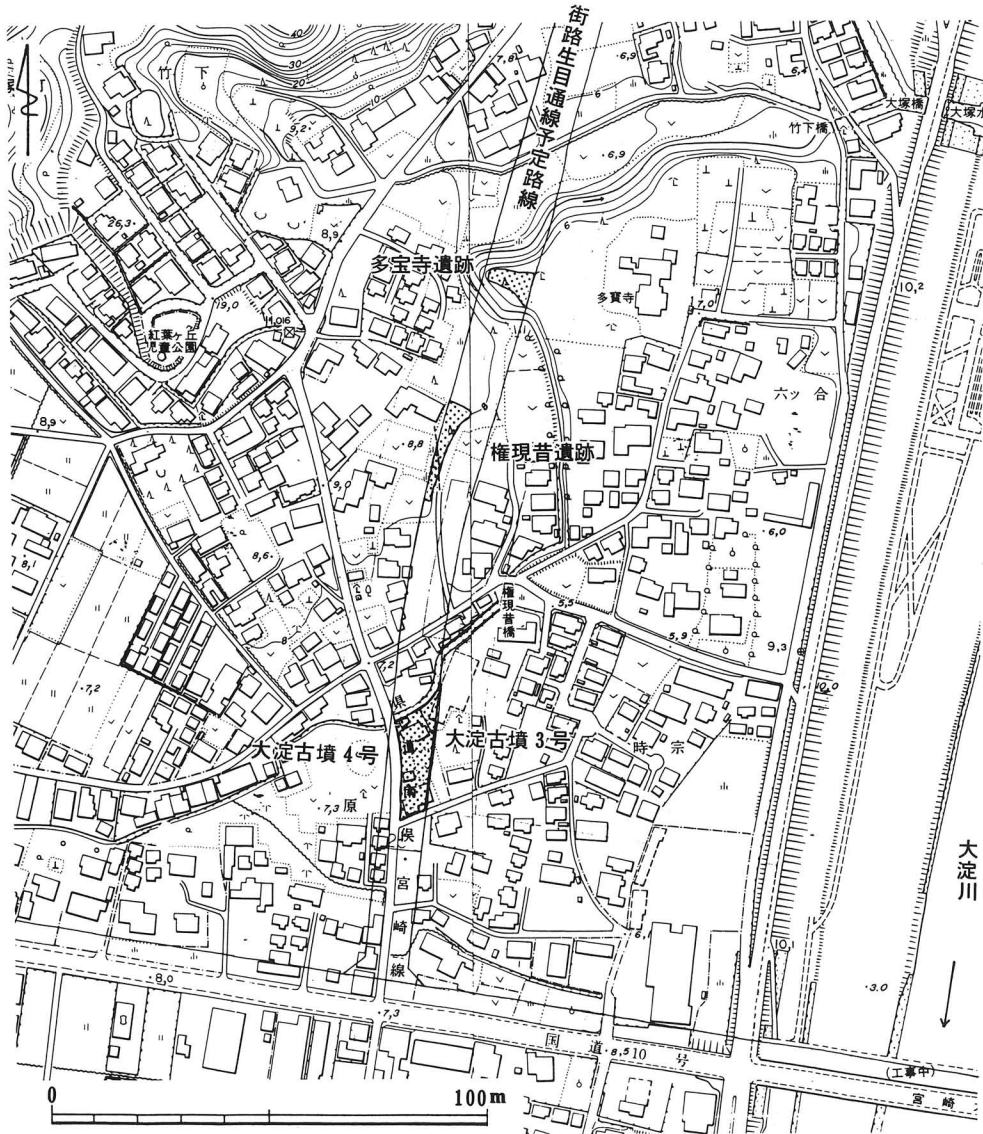
じ ぞう が もり
地 蔵 ヶ 森 遺 跡

例 言

1. 宮崎県教育委員会では、昭和62年度発掘調査として、巻末掲載の一覧表のと通りの調査を実施した。これはそのうちの4遺跡についてその概要を掲載するものである。

街路生目通線改良工事に伴う発掘調査略報

宮崎土木事務所では、現在、街路生目通線の改良工事を行っている。工事予定区内及び隣接地に県指定古墳、遺物散布地等が所在するため、県教育委員会では、土木事務所の依頼により発掘調査を行っているが、本年度は、県指定大淀古墳3号の周溝、権現昔遺跡（頭初観音昔遺跡として調査に着手している。）、多宝寺遺跡の3ヶ所を調査したのでその概要を報告する。



第9図 調査地

大 淀 3 号 墳

— 県道生目通線道路改良工事に伴う発掘調査概要 —

所 在 宮崎市大塚町時宗 1709 他

大淀3号墳は、大淀川下流域に広がる宮崎平野低地群の大淀・本庄・綾南低地の標高7.6 mに位置する。大淀古墳群は前方後円墳3基・円墳3基・横穴墓1基で構成されている。周辺には北々西3.0 kmの宮崎平野南部丘陵地の標高20 mの生目古墳群（前方後円墳8基・円墳22基・横穴墓9基）と北々東2.7 kmの宮崎平野中南部段丘群の標高10 mの下北方古墳群（前方後円墳4基・円墳12基・地下式横穴墓9基）が存在しており、両古墳群は大淀川を挟んで対峙する位置にある。生目古墳群の前方後円墳は全く発掘されていないので、詳細は不明であるが、墳丘形態からすれば4世紀後半～6世紀後半に首長墓の系譜は続く。一方、下北方古墳群は5世紀末～6世紀後半に首長墓の系譜が続くが、5世紀後半の下北方5号地下式横穴墓に代表される甲冑を有する地下式横穴墓に小豪族の伸張が窺える。そのため両古墳群を地下式横穴墓の有無による対峙する古墳群として把握してきたが、今回の大淀3号墳の周溝の発掘調査によって再考を促す結果となった。

大淀3号墳は前方後円墳として昭和12年7月2日に県指定されており、現在は後円部の墳丘が残存しているが、周辺の宅地化によって削られている所もあり、特に前方部は完全に削平されている。県道拡幅が計画されたので、昭和61年3月10日～15日に試掘調査を行った結果、後円部の周溝が確認された。路線変更が困難なため、路線部分にかかる周溝を62年5月19日～7月15日に本調査を行った。

本調査の結果、後円部の周溝は幅9.5 m、深さ0.9 mの規模で、試掘の結果、楕形の周溝ではなく後円部を円形に巡ることがわかった。墳丘の規模は直径40.0 m、高さ5.5 mであり、全長100 m級の前方後円墳である。墳丘上は削られていたが、周溝の内側斜面から焼成後の底部穿孔の二重口縁壺の底部が、周溝底から焼成前の底部穿孔の二重口縁壺が出土した。二重口縁壺はⅣ期に相当し、4世紀末に比定される。⁽¹⁾宮崎平野部での発掘調査によって明確なこの時期の前方後円墳としては初見であり、かつ底部穿孔の二重口縁壺の出土も日向にはないので注目される。

註 (1) 小郡市教育委員会 「三国ノ鼻遺跡」 1986



大淀 3 号墳全景（北西から）



大淀 3 号墳周溝（南から）

権現昔遺跡

所在地 宮崎市大塚町字権現昔

権現昔遺跡は、南流する大淀川西岸の低丘陵東裾に形成された標高約9mの河岸段丘上に立地する。遺跡は、県教育委員会で生目通線予定路線内の分布調査を行った際、土器散布地として確認され、昭和61年度、試掘調査を行った。試掘調査の結果、柱穴と推定される遺構が検出され、土師器等が少量ながら出土したことから、昭和62年度本調査を実施した。

調査により検出された遺構は、弥生後期の竪穴様遺構2基、中世の溝状遺構4条、時期不詳の土壇5基である。遺物は、弥生後期初頭に比定される口縁部が「く」の字に外反し、一条の刻目突帯をもつ甕や中世の糸切りの土師皿等が出土している。

竪穴様遺構は、1辺約2.7mが確認され、プランは四角形になると推定され深さ約10cm残存する。遺物は弥生土器が少量出土している。調査区北端では、弥生土器が多く出土しているが明瞭な遺構は確認されていない。

溝状遺構4条のうち、調査区北部を東西に走る溝は、上幅約1m、底幅約30cm、深さ約1mである。埋土はレンズ状を呈し、その上位に白ボラ（文明ボラ？）が見られる。白ボラの下層より完形の糸切りの土師皿が多量に出土している。

今回の調査により権現昔遺跡は、弥生後期初頭及び中世の遺跡であることが確認されたが、遺跡の中心は現在宅地となっている西方に広がると思われる。

図版5



北端東西溝遺物出土状況

図版 6



権現昔遺跡（北より）



北端東西溝

多宝寺遺跡

所在地 宮崎市大塚町字六ツ合

多宝寺遺跡は、南流する大淀川西岸に隣接する標高約7mの微高地上に立地する。微高地の西縁には小河川竹下川が流路をとり、その周囲に谷底低地を形成している。遺跡は、昭和51年の文化庁の全国遺跡地図「宮崎県」版では、六ツ合遺跡として記載されていたが、昭和59年発行の宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書では、弥生時代遺物散布地として多宝寺遺跡に名称が変更されている。

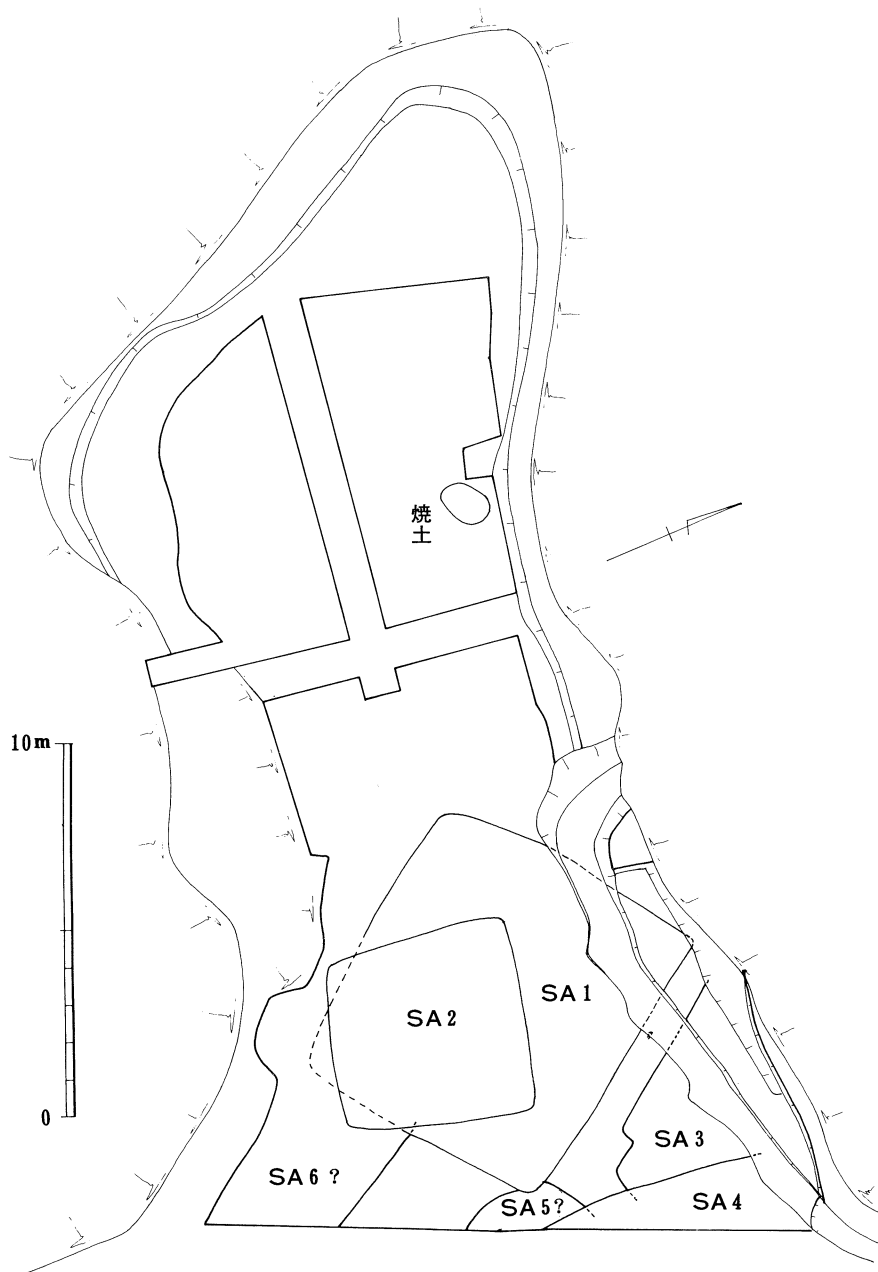
今回調査した部分は、工事により影響を受ける幅約15mの突出部である。当地の基本層序は、第Ⅰ層表土（盛土）、第Ⅱ層粘質の褐色土、第Ⅲ層褐色の粘質土を若干含む砂層に大別される。約6200年前の火山灰アカホヤは当地では見られない。なお、調査地周辺は、以前竹林であったものを畑地にするため重機により竹根の除去が行われていたが、予想外に遺構等の残存は良好であった。

検出された遺構は、竪穴住居跡4軒、土壌2基、焼土1ヶ所である。プランは明瞭でないが遺物の散布状況より竪穴住居跡と思われるものが2ヶ所ある。突出部北縁は、竹下川の浸食を受け、地すべりを起こし、竪穴住居跡の一部が消滅している。竪穴住居跡は、切り合い関係よりSA1がSA2より古く、SA4はSA3より古いことが確認されている。遺物は、SA3の埋土より須恵の第Ⅲ期のものが出土している。

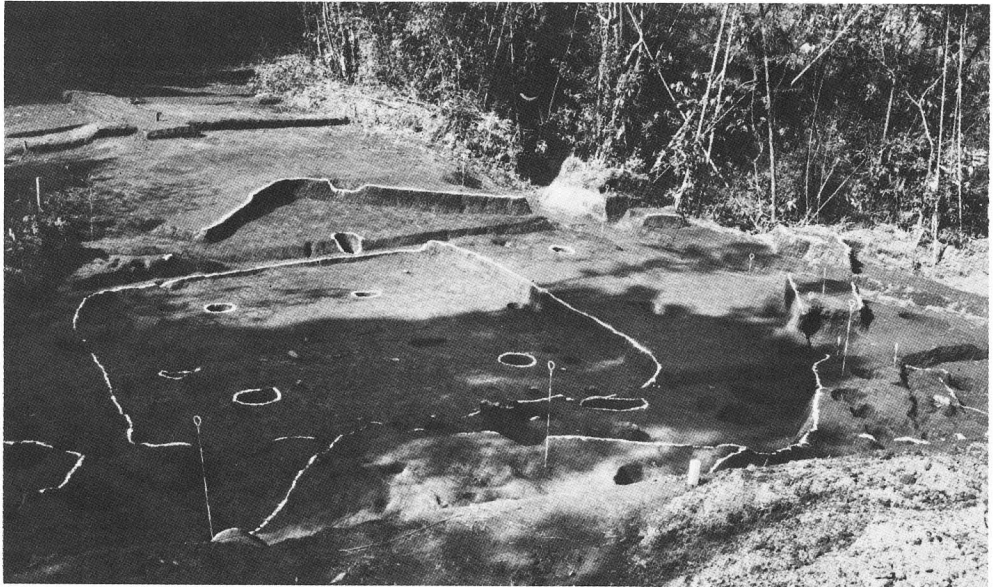
竪穴住居跡の規模が確認されたのはSA1とSA2で、SA1が8.2m×8.5m、SA2が1辺約5m、プランは方形である。SA2は、柱穴は4ヶ所で、床面中央に埋甕、南壁西よりにカマドをもつ。埋甕の周囲には焼土が見られた。同様の埋甕がSA3でも見られる。

調査区西端北では径約1.3mの焼土があり、その近くで内黒の土師器が出土している。その他、糸切りの土師皿等も若干出土している。

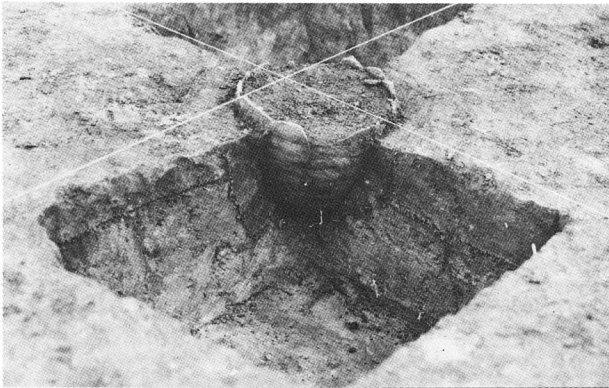
発掘調査は、突出部の約250㎡であったが、古墳時代後期の集落が確認されたことは、周辺に分布する大淀古墳との関係で注目される。集落は、多宝寺境内及び南の宅地一帯に広がるものと考えられる。



第10図 遺構分布図



多宝寺遺跡 (東より)



SA2 中央床面
埋甕

SA2 カマド



地藏ヶ森遺跡（広域農道建設事業に伴う発掘調査）

1. 調査年月日 昭和62年8月3日～同年9月9日

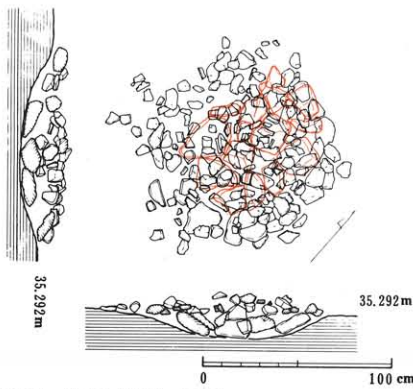
2. 調査の概要

地藏ヶ森遺跡は延岡市小峰町字後田にある。行藤山（むかばきやま）標高831mから、五ヶ瀬川に向かって南東にのびる小高い山々の一小丘陵上に位置する本遺跡は、標高約35m、平地との比高約20mある。丘陵は湾田（わんず）が複雑に入りこんで、それ自体は舌状を呈し、先端頂部は平坦地となっている。近隣の遺跡には、約200m北に近世陶磁窯として著名な小峰窯が、1.5km南には国指定史跡南方古墳群がある。

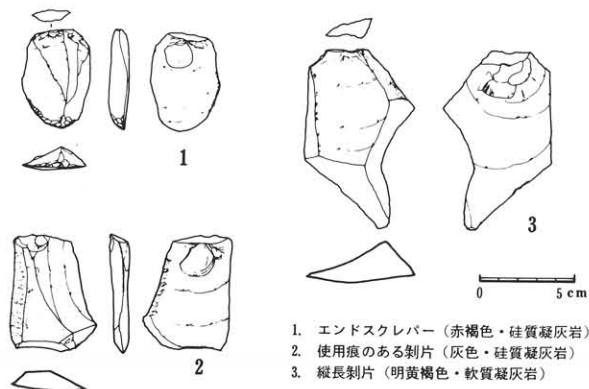
発掘区は、小谷を挟んで北西側にA区、南東側にB区を設定した。

A区 約520㎡にわたって調査している。発掘区の東側半分にかたよって、第Ⅱ層の浅黄橙色粘性土（Hve 7.5 YR 8/6）に焼礫の散漫な分布がみられ、3基の集石遺構が検出された。同面で出土した土器は押型文土器（13図1.）で、極めて少量の出土である。東側の一部は旧石器面まで掘り下げているが、旧石器遺物の出土はみえていない。表土直下に、縄文晩期前半にあたる深鉢形土器口縁部1点が出土しているが、包含層は遺存していなかった。

B区 赤ホヤ火山灰層直下を約680㎡にわたって調査している。にぶい橙色（Hve 7.5 YR 7/4）を呈する粒子の粗い粘質土中に焼礫の散漫な分布をみて、合計5基の集石遺構を検出している。集石遺構は、円形の浅い土壇を有し、土壇底に扁平で大きな板石を敷いたあと角礫を充填する典型的なものである。同面上での出土遺物は、塞ノ神式土器、あるいはそれに類すると考えられるものが主体を占めている。石器は石鏃、磨石が出土している。第Ⅲ層にあたる明褐色粘質土（Hve 7.5 YR 5/6）からはエ



第11図 地藏ヶ森遺跡（B区）
検出1号集石遺構実測図（縮尺1/40）



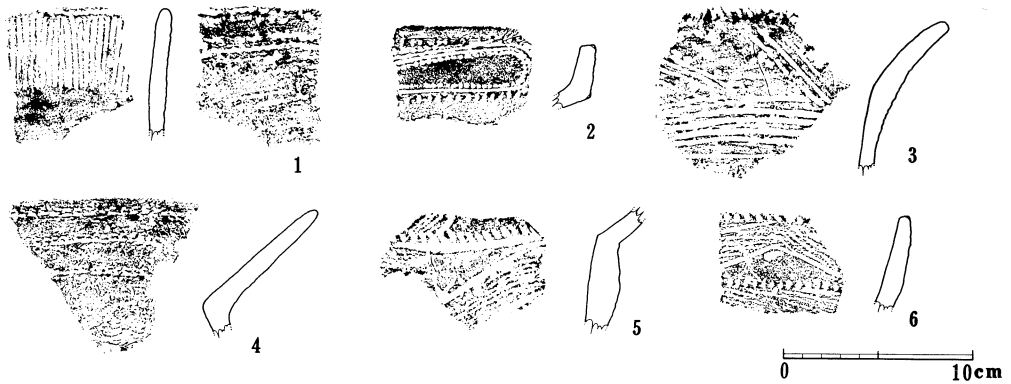
第12図 地藏ヶ森遺跡（B区）出土旧石器実測図（縮尺1/4）

ンド・スクレイパー、縦長剥片等の硅質凝灰岩製の旧石器が出土した。

遺物（石器12図、土器13図）

13図1はA区出土の楕円押型文土器である。口唇部が丸くおさまられる直行した口縁部で、外面に横位の楕円押型が施文されるが、楕円文はひとつひとつ独立しておらず横方向につながっている。内面は口唇部下4 cmまで縦方向のヘラ描き沈線が密に並ぶ。焼きは軟調であり、表面がポロポロ剥げ落ちる。内外とも赤褐色を呈し、砂粒を多く含み、石英、角閃石を含む。2は頸部の折部より短く外反するもので、口唇部外側と、口縁部と胴部の折部外側に刻目ふうに施された列点文がめぐる。胎土きわめて精良で内外ミガキ調整となる。口縁外面は、曲沈線文とそれに沿って施文される列点文の構成である。明黄褐色を呈する。3は胴部から口唇部にむかって、肥厚しながら弓なりに外反する口縁部である。口唇部に粗い刻目、口唇部直下は間隔をおいて斜方向条痕、以下横方向の条痕文となる。石英と砂粒を多く含み、長石、角閃石を含んでいる。4は大きくラップ状に開く口縁部で、胴部の屈曲部から急に外反して、口唇部は丸くおさまられる。外面に横方向3条の押引文、内面ナデ調整である。胎土に多量の長石を含み、時に2.0 mm～5.0 mm大の大粒がみとめられる。5、6は、ヘラ描き沈線区画内に撚糸文を充填するもので、5は胴部と口縁部の屈曲部付近、6は口唇部外側に刻目を有する口縁部である。2～6はB区出土土器である。

第12図1は器長5.25 cm、幅3.75 cm、厚1.1 cmを計測する赤褐色の硅質凝灰岩製エンド・スクレイパーである。平坦打面を残した縦長剥片の端部を腹面より急角度調整している。3は器長9.6 cm、幅5.7 cm、厚2.0 cmを計測する。風化して、各エッジが鈍い。背面に縦長の剥片を剥ぎとったネガティブバルブがあり、右側辺に自然面をのこす。軟質の凝灰岩製である。



第13図 地蔵ヶ森遺跡出土縄文土器実測図（縮尺1/4）

図版 8



B区 調査状況



集石遺構の検出状況

昭和61・62年度埋蔵文化財発掘調査一覧

(昭和63年2月 現在)

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	野稲尾遺跡	児湯郡川南町大字平田字野稲尾	62. 3. 30) 62. 7. 17	川南町教育委員会	近藤 協	竪穴住居跡・掘立柱建物・周溝状遺構・旧石器・縄文土器・弥生土器・石錘・磨石・石皿・石鏃・石匙・打製石斧	
2	城ヶ尾遺跡	北諸県郡高城町大字石山字城ヶ尾4474	62. 3 ~ 62. 5. 62. 6. 1 ~ 62. 7. 7	高城町教育委員会	長津宗重 寺師雄二	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・鉄製品	
3	西ノ原遺跡 (大淀1号)	宮崎市大塚町西ノ原1287番地	62. 5. 11) 62. 6. 19	県教委	永友良典	古墳・土師器	
4	寺原遺跡	西都市大字三宅5194~8他	62. 5. 18) 62. 5. 30	西都市教育委員会	日高正晴	弥生土器・石器	
5	大淀古墳 3号遺跡	宮崎市大塚町時宗1709他	62. 5. 19) 62. 7. 15	県教委	長津宗重	古墳・周溝土師器・須恵器土錘・銅銭	
6	小半田古墳	五ヶ瀬町大字桑野内字小半田	62. 5. 22) 62. 6. 30	県教委	北郷泰道	古墳	
7	松原地区 第IV遺跡	都城市郡元町3105番地他50筆	62. 5. 25) 62. 8. 13	都城市教育委員会	栗畑光博	陶器・磁器・古銭・鉄器・石器	
8	江田原第1遺跡	宮崎市吉村町江田原甲212-1	62. 6. 1) 62. 6. 13	宮崎市教育委員会	荒武麗子	土師器・須恵器鉄製品・石斧・石錘	
9	北原牧地区遺跡 (蔵園外)	児湯郡新富町大字三納代3200番地の1	62. 6. 9) 62. 6. 13	県教委	面高哲郎	古墳・須恵器	確認調査
10	塩田遺跡	東臼杵郡北方町字塩田外	62. 6. 15) 62. 6. 18	北方町教育委員会	面高哲郎	集石遺構 縄文土器(早期) 古銭・剝片	確認調査
11	松ヶ迫B遺跡	児湯郡川南町大字川南字松ヶ迫	62. 7. 7	県教委	面高哲郎	なし	確認調査

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
12	都於郡城 本丸跡遺跡	西都市大字荒武 141, 142~1	62. 7. 20) 62. 10. 8	西都市 教育委員会	日高正晴	城跡・青磁 白磁・染付 土師器・石斧 陶器片	
13	北原牧地区遺跡 (上園外)	新富町大字日置 字上園・古園	62. 7.) 62. 2. 3	新富町 教育委員会	有田辰美 長津宗重 谷口武範	竪穴住居跡・掘立柱 建物・古墳・溝状遺 構・土壌・弥生土器 ・土師器・須恵器 鉄器	
14	金ヶ浜遺跡	日向市大字平岩 1602	62. 7. 21) 62. 7. 25	日向市 教育委員会	緒方博文	集石遺構・旧石器 縄文土器・弥生土 器・土師器・須恵 器・陶磁器・石器	
15	松本遺跡	西都市大字三納 1092外	62. 7. 21) 62. 11. 24	西都市 教育委員会	蓑方政幾	円筒埴輪 形象埴輪 須恵器	
16	地藏ヶ森遺跡	延岡市小峰町 字後田	62. 8. 3) 62. 9. 9	県教委	近藤協	集石遺構 旧石器 縄文土器	
17	唐人町遺跡	串間市大字西方 字唐人町9312~ 3外	62. 8. 4) 62. 10. 15	県教委	北郷泰道	溝状遺構・柱穴 ・細石刃・弥生土 器・土師器・ 須恵器	
18	丸野第2遺跡	宮崎郡田野町 赤松乙3887-2 外	62. 8. 25) 62. 10. 29	田野町 教育委員会	菅付和樹	石組遺構 縄文土器	
19	多ヶ淵遺跡	宮崎郡佐土原町 大字下那珂 字多ヶ淵	62. 8. 24) 62. 8. 25	県教委	面高哲郎	溝状遺構 土師器	確認 調査
20	丸山石棺墓群	西臼杵郡高千穂 町大字河内 字丸山 745	62. 8. 24) 62. 9. 1	高千穂町 教育委員会	永友良典	箱式石棺・鉄鏃	
21	紙屋城跡遺跡	野尻町大字紙屋 字城原	62. 9. 9) 62. 12. 26	野尻町 教育委員会	近藤協	中世城跡 土師器・陶磁器	
22	小木原地下式 横穴群	えびの市大字 上江字藤	62. 9. 14) 63. 1. 29	えびの市 教育委員会	永友良典	土壌墓・地下式横穴 墓・板石積石室墓・ 木棺直葬墓・弥生土 器・土師器・鉄剣・ 鉄鏃	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
23	観音昔 多宝寺遺跡	宮崎市大塚町 字観音昔外	62. 9. 18) 62. 12. 5	県教委	面高哲郎	竪穴住居跡(古墳) 溝状遺構(中世) 土師器・須恵器 弥生土器	
24	浜田遺跡	串間市大字南方 字浜田2908-14	62. 9. 21	串間市 教育委員会	北郷泰道	石棺・直刀 鉄鏃	
25	幣田遺跡	えびの市大字 亀沢字山崎	62. 9. 28	えびの市 教育委員会	永友良典	陶磁	確認 調査
26	平畑遺跡	宮崎市大字熊野 7701	62. 10. 19) 62. 11. 30	宮崎大学	菅付和樹 寺師雄二	竪穴住居跡 柱穴・縄文土器	
27	林遺跡	延岡市伊形町 字林	62. 10. 26) 62. 12. 18	県教委	北郷泰道	掘立柱建物 旧石器	
28	落鹿遺跡	日向市美々津町	62. 11. 5) 63. 1. 23	日向市 教育委員会	緒方博文	竪穴住居跡 集石遺構 弥生土器・石器	
29	犬馬場遺跡	宮崎市大字熊野 7701	62. 11. 16) 63. 1. 14	宮崎大学	寺師雄二	集石遺構 竪穴住居跡(弥生)	
30	五十市遺跡 (宮尾・立野)	都城市今町7020	62. 11. 30) 62. 12. 5	都城市 教育委員会	栗畑光博	なし	確認 調査
31	吾平原第2遺跡	高千穂町 大字三田井	62. 12. 7) 62. 12. 18	県教委	岩永哲夫	縄文土器	確認 調査
32	立切地下式 横穴群	西諸県郡高原町 大字後川内 字立切	62. 12. 11) 62. 12. 25	高原町 教育委員会	面高哲郎	地下式横穴 人骨・鉄鏃 直刀	
33	木城村古墳	児湯郡木城町 大字椎木字大戸 亀1164~1	63. 1. 5) 63. 1. 8	木城町 教育委員会	近藤協	集石遺構 古墳周溝 須恵器	確認 調査

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
34	七野地区遺跡	宮崎郡田野町 七野	63. 1. 11 } 63. 1. 14	県教委	面高哲郎	縄文土器・剝片	確認 調査
35	母智丘原遺跡 (母智丘神社境内)	都城市横市町 6691	63. 1. 18 } 63. 1. 29	都城市 教育委員会	矢部喜多夫 柴畑光博	土壌・弥生土器 土師器	
36	小木原地下式 横穴群	えびの市大字 上江	63. 1. 18 } 63. 1. 22	県教委	近藤 協	土師皿・青磁 陶磁器	確認 調査
37	上百町原 地区遺跡	日向市美々津町 字百町原	63. 1. 19 } 63. 1. 23	県教委	面高哲郎	剝片(旧石器)	確認 調査
38	春姫登横穴群	西臼杵郡高千穂 町大字上岩戸字 春姫登 405	63. 1. 25 } 63. 1. 28	高千穂町 教育委員会	北郷泰道	横穴墓	
39	加治屋遺跡	都城市南横市町 2066	63. 1. 25 } 63. 2. 6	都城市 教育委員会	矢部喜多夫 柴畑光博	竪穴住居跡 弥生土器・石器 鉄器	
40	角上原地区遺跡	宮崎郡清武町 大字今泉	63. 2. 1 } 63. 2. 5	県教委	近藤 協	溝状遺構・柱穴 弥生土器	確認 調査
41	金剛寺原遺跡	宮崎市大字 瓜生野字 金剛寺原他	63. 2. 9 } 63. 2. 11	県教委	近藤 協	集石遺構 剝片石器	確認 調査
42	七又木地区遺跡	児湯郡新富町 大字新田字 七又木・棚ヶ迫	63. 2. 16 } 63. 2. 26	県教委	長津宗重	柱穴・溝状遺構・ 縄文土器・弥生土 器・土師器・石斧 石鏃・石庖丁	確認 調査

昭和62年発行宮崎県市町村教育委員会発行埋蔵文化財調査報告書一覧

番号	書名	遺跡名(ふりがな)	時代	種類	発行機関
1	宮崎県文化財調査報告書 第30集	中米満(なかよねみつ)遺跡 林(はやし)遺跡 水谷原(みずやばる)遺跡	中世 <small>旧石器～ 近世</small> 縄文	散布地 住居址・水田址 集石遺構	宮崎県教委
2	宮崎大学跡地遺跡発掘調査報告書 I 船塚遺跡	船塚(ふなつか)遺跡	古墳	溝・土壇	宮崎県教委
3	昭和61年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概報	北原牧(きたはらまき)地区遺跡 呼谷(つぼや)地区遺跡 地蔵ヶ森(じぞうがもり)遺跡 城原(じょうばる)地区遺跡 松本(まつもと)遺跡	<small>旧石器～ 弥生</small> 縄文 <small>旧石器・ 縄文</small> 縄文 古墳	試掘 試掘 試掘 試掘 試掘	宮崎県教委
4	宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(VI)	陣ノ内(じんのうち)遺跡 車坂(くるまざか)城跡	古墳 中世	集落 城郭	宮崎県教委
5	埋蔵文化財調査研究報告書 I 陣内第2遺跡 蓮ヶ池横穴墓群 — 遺物編 —	陣内第2遺跡(じんない) 蓮ヶ池(はすがいけ)横穴墓群	縄文 古墳	包含層 横穴	宮崎県総合博物館
6	田野町文化財調査報告書 第4集 丸野第2遺跡	丸野(まるの)第2遺跡	縄文	集落	田野町教委
7	野尻町文化財調査報告書 第2集 東城原第1～第3遺跡	東城原(ひがしじょうばる) 第1・2・3遺跡	縄文	集石遺構	野尻町教委
8	串間市文化財調査報告書 第1集 猪之椏遺跡	猪之椏(いのはえ)遺跡	縄文	集石遺構	串間市教委
9	東郷町文化財調査報告書 第1集 赤松・下水流遺跡	赤松(あかまつ)遺跡 下水流(しもずる)遺跡	縄文・中世 縄文	掘立柱建物 散布地	東郷町教委
10	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 冨横穴墓, 元地原地下式 墳墓群	冨(かこい)横穴墓 元地原(もとじばる)地下式 横穴	古墳	古墳	西都市教委

番号	書名	遺跡名(ふりがな)	時代	種類	発行機関
11	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 松本遺跡	松本(まつもと)遺跡	古墳	古墳	西都市教委
12	宮崎市文化財調査報告書 源藤遺跡	源藤(げんどう)遺跡	弥生～ 古墳	集落	宮崎市教委
13	宮崎市文化財調査報告書 中岡遺跡	中岡(なかおか)遺跡	弥生	祭祠遺跡	宮崎市教委
14	都城市遺跡詳細分布調査報告書 (市内中央部)	—————	各時代	各種	都城市教委

埋蔵文化財関係図書

- ・西都原古墳研究所 年報 第4号 昭62. 3. 31 西都市教育委員会
- ・宮崎県総合博物館研究紀要(第12輯) 昭62. 3. 31 宮崎県総合博物館

宮崎県文化財調査報告書

第 31 集

昭和63年3月

発 行 宮崎県教育委員会

編 集 宮崎県教育庁文化課